

■特集

追悼黒田武志老師

平成十六年十二月二十九日、黒田武志老師が遷化され、まもなく一年。この間に老師を偶び、皆様から寄せられた追悼のお言葉をご紹介します。



追悼のことば

大本山總持寺貫首 大道晃仙

横浜市・善光寺住職黒田武志老師のご遷化に際し、謹んで哀悼の意を表します。

「釈尊のお示しになった大慈悲の教えを如何にして世界全体に広めてゆくか。」多くの仏教者が思いを巡らすその永遠の目標に向かって、自ら身をもって具体的にそして積極的に実践されたのが老師のご生涯でありました。

自らの宗教活動の信念を「宗祖を通して釈尊に還る」という言葉で常々表現しておられたと承っております。

世界に仏教を広めるといふその大誓願を成就するには、まず人材を育成するといふことから始めなければなりません。

そこで老師は昭和五十九年に、「善光寺海外留学僧派遣育英会」を一カ寺独力で設立し、毎年

留学僧を海外に派遣するという事業を興しました。他国からの求道者も日本に招き、事業全体が確固たる成果を実現するに至りました。誓願成就への勇猛心、そして実行力、まことに称賛に堪えません。

昨今世界各地において悲惨なテロや戦闘が連鎖し、平和とはほど遠い状況を呈しています。国や民族間でお互いに自らの考えや価値観を相手におしつけようとするために、多くの惨劇が繰り返されています。

現代はまさに広い視野に立つての相互理解と、代償を顧みない大いなる慈悲の心が希求される時代であります。世界の平和、人々の幸福のためは今何ができるのかといふことをわれわれは問い直し、そして具体的な活動をどのように展開させるべきなのかを考えてゆかなければなりません。

そのことはすなわち、一生をその大命題に捧

げた老師の歩まれた道を、今一度われわれが深く学び、そこを抛りどころとして世の中に広く働きかけてゆくことにつながります。老師の御徳は賛嘆し尽くせません。

ここに重ねて老師のご遷化を心から悼み、追悼のことばといたします。



八面六臂の大菩薩

前永平寺監院 南澤道人

黒田武志老師が遷化されて早くも一周年の忌景を迎えようとしております。月日の経つのは歳と共に迅速に感じられます。

老師のことは善光寺海外僧育英事業のことで業界紙等を通じて大まかには知って居りましたが、直接お目に掛かることが出来たのは私が大本山永平寺の監院職に就いてからであります。

或る時老師は御令室と共に上山されて、善光寺海外僧育英会について、両大本山禪師さまのご慈慮をいただき、それぞれ監院に役員に加わってほしいと就任の要請に見えた時でした。然しそれより以前長野市篠ノ井円福寺藤本幸邦老師の処でお話しの折、偶々黒田老師の事に話が及びました処、実は黒田老師のご両親は藤本老師のご先代全機老師が取り持ったご縁で、ご母堂

は須坂市の名刹興國寺先々代のお嬢様であつて、此の寺の座敷がお見合いの場所ですと、お聞きして、信州人の一人として何か身近なご縁を思つたことです。

やがて善光寺様に拝登の機会も出来、次第にご親交を重ねていただきましたが、取りわけお世話になつたのは、中国から留学の為に来日して私の弟子となつて駒澤大学を卒業した胡君が、育英生として認めて頂きドイツ等に留学し、又善光寺に於て立職法戦式をさせて頂いたご恩は忘れることが出来ません。

高祖道元禪師七五〇回大遠忌には焼香師をお勤めいただき、育英事業の着実な発展を願ひ、善光寺の興隆は勿論、タイ、スリランカ、中国、韓国等海外仏教者との交流友好に奔走された老師は正に八面六臂の大活躍をされた大菩薩であられたと思います。

今既に育英会のご支援を頂いた優秀な人材が

各方面に活躍され、将来の仏教の興隆と世界の平和に大きな力となることでしよう。

大寂定中安らかにお見守り下さるよう老大和尚の品位増崇を念じて止みません。

合掌



黒田老師を偲ぶ

大雄山最乗寺山主 石附周行

今春、四月九日〜十日にわたって、成田市郊外にタイ国ワット・パクナム日本別院ウポソト（布薩堂）の落慶式が行われた。かつてワット・パクナムで修行したご縁の方々と一緒に参列し、その日はあたかもタイ国に居るような雰囲気であった。

ワット・パクナムの住職さま以下百名の僧侶が来日され、境内は熱心な在日タイ国人の仏教徒で大盛況であった。

住職さまが私共の席を通られる時、「クロダ・クロダ」と掌を合せられ挨拶をいただき胸がつかまる思いであった。

黒田武志老師は日本パクナム会の会長をつとめられ、日タイ仏教界の交流に力をよく尽された。この日の落慶式出席の方法、別院への支援・

協力のあり方に心を砕いておられ、亡くなられる前年の十一月に打合せ会議を開き、握手をして別れたのが最後であった。

私は、黒田老師に多大なご法愛をいただいた。大学時代には、桐ヶ谷寺さんに時折寄せていただき、彼の書齋で熱心に日記を書いていたのを強烈に思い出す。その後、両本山の安居を経て、ワット・パクナムに安居することになった。これは、彼の発案であり、私は彼の陰に寄り添って行った。

黒田老師というお方は、自分の個性を相手に印象づけたとしても、決して相手に先んじて歩むことはされなかった。私は、どんなにか引き立てていただいたり助けてもらったりしたことか。

国際的感覚は抜群で、幅広い人材の育成には生涯をかけたといってもよいだろう。善光寺育英会の留学僧派遣事業は、一寺院単位では向後

にみる事ができないのではないかと思う。

彼は、握手をくったくなく差し伸べたが、あの骨太のゴキゴキした感触は、忘れることができない。あの手で書いた日記も、いまでも書き続けているように思えてならない。

一周忌を迎えるに当たって、彼を偲びつつ大寂定中で如何お過ごしか——と尋ねてみたが、破顔微笑するのみで、握手は返ってこなかった。



全力疾走の生涯67年

曹洞宗大乘寺山主 東 隆眞

平成十六年十二月二十九日午前九時四十五分、横浜市の曹洞宗善光寺第二世・黒田武志老師は遷化した。病名は大腸癌。世寿六十七歳。

同学の畏友、大八木春邦老師（山形県・保春寺住職）から、この日の午後、電話でしらせをうけた。手がけていた寺務を即時中断し、直ちに弔問に走った。梅嘉庵で倫子夫人にご挨拶して、黒田老師のご遺体を拝した。

あの闊達豪快な黒田君（以下、同窓のよしみで親しみをこめて黒田君とよぶ）が、年長の私を措いて旅立つとは、なんということか。口もとに笑みをうかべたおだやかな表情で横たわっているすがたをみて、これは、私はからかわれているのではないか、今にも、冗談だ、冗談だよ、ハハハハと起きあがってくるのではないか

と疑いたいほどであった。黒田君と私は、駒澤大学、同大学院と同級であって、およそ五十年にわたって深いちぎりを結んできた。ここに、思いつくまま黒田君を追悼したい。

まず、黒田君は、信心のあつい人であった。仏教僧が仏教の信心にあついのはあたりまえだが、そのあたりまえのころを豊かにそなえていた。私は、国の内外をなんだか一緒に旅行したが、ホテルの自室でも、午前四時前後には起床し、念持仏をテーブルの上に安置し経文を誦んでいた。お仏舍利を尊崇し、国外、国内の各地の道場にさまざまなかたちで物心両面の供養をしてきている。諸仏、諸菩薩の像を日本国、外国の多くの寺院、精舎に寄進している。ひと知れず、こういう陰徳を積んでいるのである。また、黒田君は、誓願に生きた人だといいたい。若いころ、大本山永平寺、大本山総持寺の僧堂から全国を托鉢行脚し、タイのワット・パ

クナム、アメリカの禅センターで修行し、血と涙と汗を流して苦勞を積み、やがて横浜市に善光寺を開創した。事実上、善光寺の開山である。その根底にみなぎる原動力は、道元禪師、瑩山禪師の両祖を通じて釈尊にかえるという願いであり、誓いであり、祈りであった。

黒田君は、善光寺でありとあらゆる教化活動を展開している。黒田君に帰依する壇信徒は三千軒といい、あるいは五千軒ともうわさされる驚異的数字である。それは、黒田君の誓願力による辛苦のおのずからなる結果であったといえよう。

また、黒田君は、現代の日本仏教界、わけでも曹洞宗において群を抜いた国際人、世界人であったといつてよい。これはアメリカ開教に生涯をささげた実兄前角博雄老師の指導、影響も無視できないが、タイ、アメリカをはじめ、ヨーロッパ、インド、東南アジア、韓国など、各国

に出かけ、また、かの地の仏教者と交流を密にした。

「横浜善光寺留学僧育英会」を結成して、みずから理事長となった。その成果は、平成十四年一月の時点で、すでに関係国二十カ国一地域、百十四件に及ぶ。善光寺檀信徒の理解、協力の賜でもある。これはすべて黒田君の単独、善光寺一カ寺の浄業であるところが特長である。このような例は、あまりない。少なくとも、日本仏教界でのこの種の活動の先駆者といえよう。また、黒田君は、後進の人材育成にも力を注いだ。育英会は、その典型である。育英資金を受けた者のなかには、学位取得者三人、大学教授数人がいる。黒田君のもとで出家得度した人は、老若男女あわせて三十人、いや五十人を超えるだろうという。

黒田君は、ご子息四人を、タイのワット・パクナムのプラ・マハージャマンガチャラ住職を

招いて、タイ仏教上座部の得度を受けさせた。このとき中村元博士も同席された。日本仏教史上、最初の出来事であろう。あるいは、若い者に、だれかれとなく、そつと小遣いを渡し、将来を嘱望したのである。

黒田君は、人間的魅力に富んだ人であった。倫子夫人を二六時中たよりにし、あてにして、「ミチコ、ミチコ」と呼んだのは、誰でも知っているほほえましいエピソードである。その夫人は、寡黙で、ものしずかで、みずから「口下手です」とおっしゃる。

歌を愛し、酒を愛し、美術品を愛した。ことにあたっては即決、即断まさに実践の権化であった。私は、黒田君と倫子夫人に京都の清水寺観音さまの境内に瑩山禪師にかかわる建碑をはかった。清水寺の森貫さま、大西寺務長さま、森庶務部長さまのご理解をいただいで成就したとき、私は、随所に黒田君の人間的魅力を大きく

感じた。

思い出せば、雲のように、次から次から湧きおこる。このへんでやめる。黒田君の生涯は、全力疾走の六十七年であった。

黒田君、ほんとうに、ながいあいだ、いろいろ、たくさん、ありがとう。

(平成十七年一月二十二日付「内外日報」より転載)



あの熱血さが忘れられません

清水寺貫主 森清範大僧正猊下

瑩山禪師様の碑がご縁で曹洞宗の方ともお話しする機会が増えました。新潟県のある寺に行くくと總持寺の中興記がありまして、それを見るところ瑩山禪師様が總持寺の形成されていく姿をご覧になって清水寺のように実に壮観だったと書かれていました。そんなことにもご縁を感じていましたところですよ。

今でも、黒田老師のエネルギーシユな話し振りが思い出されます。ファイトある方でした。そうでなければ、あんな立派な碑ができないでしょう。碑の裏には英文も刻まれていましたね。人は「熱血」というものに惚れるものですね。黒田老師は道元様のご威光を実行して、それをこつこつと実現なさっておられました。(談)

なぜ……方丈さん……

檀家総代 熊谷豊太郎

平成十六年十二月十日、お見舞に病院を訪ねました。冬の落日でも大きな窓の部屋は明るく、方丈さんはベッドの上上半身を起こした姿勢で、にこやかに迎えてくれました。

ベッドに寄ると方丈さんは、無言で手を伸ばされ、自然と握手となりました。初めての握手でしたが、ぬくもりと意外に強かった握力、その感触は今でも掌にはつきりと残っております。傍に腰をおろすと「ハーバード大学の講演が」と言いかけ、あとは言葉がなく、私は「体力をつけねば」と互いに半端な話をしたまま、他の会話に移ってしまいました。

そして、この日が生前最後の対面となり、終生忘れ得ぬお別れの日となってしまいました。方丈さんは九月頃渡米、大学三校において講演

を予定、その準備をすすめていた事情もあり、力をこめた握手には、病床に在って、儘ならぬ無念の思いがあったのでは……と察せられます。

十二月二十九日九時四十五分に遷化された訃報は、丁度私が実弟の告別式に参列中に知らされました。前日、前々日と寺にて打合せもして、心構えはあったつもりでも、人の生命のはかなさを、思わざるを得ませんでした。

翌三十日心せくまま梅嘉庵に急ぎ、御遺体を拝しました。こみあげてくる感情のまま、「方丈さん、なぜ、このような姿に、なぜ」と、おだやかな表情に、かすかな微笑さえ浮かべておられる安らかなお姿に、唯々、座りこんで合掌するのみでした。

葬儀は平成十七年一月五日、横浜善光寺の釈迦殿に於て檀信徒葬として厳粛に執り行われ、突然の訃報に生前を偲び悲しむ二〇〇〇名の参列者で溢れました。

遷化された住職の葬儀は、宗門のしきりで行うのが慣例との由。方丈さんは、生前「今あるのは壇信徒のお蔭、私の葬儀は壇信徒葬にして欲しい」と意志を強く告げておりました。

方丈さんと壇信徒との固い結びつきは、慈愛に満ちた温かいお人柄に三〇〇〇を超す壇信徒の誰もが、信頼と敬愛の確かな心の連なりとなっており、方丈さんも常に感謝の念で接しておりました。しかし、殊、理不尽には絶対に妥協しない毅然たる気骨の持主でもありません。

又、深い思慮の上に立ち、大きなスケールで将来を見ずえる先見性により、二十一年前に仏教会より高く評価されている、横浜善光寺留学僧育英会を創設、国際的人材育成と教化活動をすすめ、関係する国は二十三ヶ国と二地域、留学僧は一一六名に及ぶ実績を挙げております。

ゼロから現在の寺門迄三十六年間、二人三脚で苦勞を共にした倫子夫人は、万事控え目で自

らは語りませんが、方丈さんは「ミチ子のおかげ」「ミチ子がいなかったら善光寺はなかった」とシンミリ幾度か話しておられたことを思い出します。

方丈さんも努力の人でした。毎朝四時頃より一とおりのお勤めを済まして、人知れず勉強に励んでおられました。約二万五千冊の蔵書を納めた「羅漢堂善光寺文庫」と名づけた書庫を設け、貴重な文献、高価な書籍も蔵しております。

托鉢行脚から国内、国際的布教活動、行事、記念式典、大教師補任等六十七年間の多面的な道程を駆けぬけていきました。私は溢れるほどの人間的魅力に、対面するだけで安らぎ、楽しく会話を交わすことができました。

方丈さんは「宗祖を通して釈尊に還る」と教えておりました。すべては因縁によって生起するという釈迦の本源に還って、捉われやこだわりのない心境にて、遷化されたものと拝してい

ます。

頂戴した額縁に納めた遺影を安置、毎日みつめあうように拝して、無念に思いつつも、ほほえむ温顔に在りし日の偉徳をつきることなく偲んでいきます。

終りに、成寿山善光寺二世中興大円武志大和尚のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌



黒田武志方丈を悼む

防衛医科大学校 名誉教授
三越厚生事業団 常務理事

中村治雄

三年近くのアメリカ留学から帰国して、母から日野のお寺に面白いお坊さんがいると聞いていた。留学中に死亡した父のお参りに行き、善光寺の前身の質素なお寺で、声の大きい、活発な方丈に初めてお逢いした。方丈もロサンゼルスの禅寺で修行して帰ってきて間もないという。お互いに将来の抱負を語り、意気投合することとなった。

寺を大きく新しくして、活気あるものにしたいと考えている様子がまざまざと伺えた。

以来、方丈の活躍は目を見張るものがあり、その企画力と、やさしさから、多くの人達の信頼を集め、檀家の数を増やし、寺の改築、増設などを進めてきた。

寺で開設された医事相談など、当時としてはユニークな試みであり、年一回敬老の日に応援してきた。

寺門の興隆のために、人材の育成も大事であると考え、多くのお弟子さんを育ててきた。尊敬され、魅力あるお坊さんを育てて行くことも方丈の一つの使命と考えていたに違いない。

その国際性豊かな所からも、留学僧の援助など、広い視野から物を見ること、しかも先を読む洞察力など、僧侶とは思えぬ所も多かった。

機関車のごとく、強力な力で、皆を引っ張り、目的に向かって日々進んで行く様子は敬服に値した。

しかし、突然病に倒れ、志半ばで遷化されたことは本人としても口惜しかったに違いない。疾風の如く現れ、私達を追い抜いて去られたことは、私達にとっても残念でならない。

ただ、後を守る者の自覚と奮起を促すことと

もなり、それを糧に、これからの善光寺を盛り立てていかねばならない。

ここに慎んで哀悼の意を表したい。



方丈様の想い出

善光寺婦人会会長 伊藤初枝

かれこれ四十年前になりましようか、主人がインドでハンセン病治療センターの設計のお仕事をしている時、たびたびアグラの建築現場に足を運んでおりました。ある日搭乗した機内にインド仏跡廻りの僧侶の方々の中、方丈様がおられたのです。

主人は趣味で仏画を描いておりましたので多分主人がお声を掛けたのか、二人はたちまち意気投合し御一緒に仏跡廻りをする事になったのでした。見事な仏跡に心打たれ次々と絵を描く主人に、若き青年僧の方丈様は大そう興味をもって下さった様です。

帰国後早速我が家にお訪ね下さり、以来善光寺様との親しいお付合は今日に至っております。その御縁で「成寿」の挿し絵も描かせて頂く事

になったのです。その後幸運にも十五年目に釈迦殿の設計もさせて頂きました。

昭和四十四年にはお似合いの倫子様を奥様に迎えられ、私共が仲人をさせて頂きました。

方丈様は常に人のためと身を削り頑張つてこられ、育英会を作られ、毎年日本のみならず海外からも二、三名の方を受け入れてこられ、勉強と交流の機会を与えてこられました。御子息の博志さんも今日立派にお勤めされておられます。

平成三年に主人が他界致しました後も、何かとお心遣いをして頂きいつも感謝の気持ちでいっぱいです。

まだまだ早い方丈様とのお別れとなり、本当に残念の極みでございますが、もしかすると主人と二人愉しく仏画のお話しでもしていらっしゃるかもしれません。

敬老の日にお届け下さいました美事に咲いた

胡蝶蘭を眺め乍ら、方丈様を想い出しております。

心からの御冥福をお祈りする日々でございます。



会者定離（出逢いそして別れ）

金蘭の友 東郷 敏

きのうのこのように実に鮮明なのです。大圓和尚と私の出逢い。もう四十年も前になりましょうか、大本山總持寺、夏期の接心会。多分一週間の参禅会、二十六歳の夏でした。仏教も坐禅のなんたるかも全く承知しない私。

会社は社員教育の一環として職場を放棄してまで、初めての試みだったようです。社長自ら幹部社員七名を引き連れた参禅。やがてこの社長、成寿山善光寺の開基になってしまいました。参禅は社命、否応なしでした。給料のためにと止むなく、仕方なく従った、なにもここまです登らなくとも、人間になる方法はいくらでもある——と煩悶はんもんしていたこと覚えております。

さて坐して私は一向に腹が坐らない。身心脱落の境界全く見えず、さらには、求められる感

謝報恩の心など微塵も湧いて来ない。僧堂は至る處、若い雲水が屯して訓戒の捧を手に指導して下さる。

ただ「坐る」だけなのにそれができない。にっちもさつちもゆかぬとは、まったくこのこと。私に心構えがないから、坐相に表れていたに違いない。不意に「コラッ！キサマたるんだ、死ネエ」とくる。どうも私に恨みをもつ、一人の雲水、一度や二度ではない。一瞬体が弾け、天井まで跳ね上がってしまう。クソッ、いまは囚われの身、これが終わったらやられた分、遣り返す、などなんとも恐ろしい気概、変に勇気が湧いてきた。

それからというもの、私にとって特別な雲水、一点集中、寂とした世界、一朝の止靜。私は夕イミングをはかりながら、合掌ポーズ、警策所望。

どのお顔か確認の必要あり、ために振り返っ

たのです。この所行、のち雲水より、きびしい叱責、危うく耳を削ぐところ危険この上なし、とイターイ灸を据えられました。

ときに「同時というは不違なり」雲水は私の背なに向い合掌低頭。顔が見えない。この憎ッくき奴、なんとという所作。それまで、憎い憎い、悪い悪いと、思い込んでいたのに雲水の奴私に祈っている、どうしたことだ。嗚呼私は思い違いをしていたらしい。

間違ったことを本当と勘違いしている。私はよく間違ひ、すぐ反省する。なんと愚か者か。「突然悪人が善人に変った」思わずゴメン。この憎ッくき御仁こそ大圓大和尚、若き雲水、黒田武志その人だった。共に同じく二十と六。

これが縁起、以来互いは境界線を頻繁に犯し合い、一所懸命生きてきた。いかにも不惜身命、知己の間柄。喇叭の方丈、悪態極悪人のトーゴなどと罵り合い、咬みついて実に四十一年。

同じ道を、同じ志で、同じ方向に、引き摺られるように歩いて来た思いがする。この間柄に誇張はない。以心伝心私は言う、開基となった社長、そして大圓和尚のためだったら、どんな犠牲も厭わない、たとえそのため一命捧げようとも悔いはなし、これは意識しなくても、いつでも肝に坐っていた。

しかしそれは叶わなかった。方丈と私の間は、逢うごとに、わかれるごとに夢が膨らみ、その夢は、都度大概成就する。不思議だった。なんど会っても、その場限りということは一度もない。和尚はその間、寝ても覚めても「祖師を通して釈尊に還る」「利他の思想で発願利生」が基本。この原点の美しき理念は、終生変っていない。生半可ではなかった。

此処五年なぜか、話しても書いても「ボクには残された時間が微すくない、限られた刻々ときになにをするのか、なにができるのかそればかり考え

ている」と言う。これは一体なんだっただろう。大圓さまには、天より賦与された武志道へのなにか黙示か示唆か。

「なにもかも、み仏さまにおまかせすればいいんだヨ」と言いながら、マコト疾風の如く駆け抜けて行った大圓和尚。キットくみ仏さまに救われて召されて逝かれたに違いない。その「生き方」に悔いも、心残りも聊かもなかったと信じている。

大圓武志大和尚をお送りするときマイクを手に、倫子夫人「命なるか。命なるか。これが天命というものなのでしょう。如何ともなりません。この上は心から現実に従います境遇はとも悲しいです。でも負けずに精進します。横浜善光寺の未来は檀家さまと共に洋々としております。すべては方丈さまの御蔭。ありがとございました」と美しく結んでおいででした。やはりみ仏さまに抱かれておいでです。

過ぎた日、生者必滅・会者定離とは善くも謂うたもの、よく翼、命なる哉。

阿啞!! 喇叭の方丈はもういない。オレだオレだの声も届かない。さびしいなあー。
逢うてわずか、別れても僅か三六五日。

合掌



誓願に生きた人

中外日報社中部支社長 形山俊彦

日野公園墓地にさしかかるゆるやかな坂道を何度往来したことだろう。石材店の角を左に折れると釈迦殿に至る。いつの頃からか釈迦殿入口ではなく、奥まった庫裡の玄関から出入りするようになった。がらりと引き戸を開けて声をかけると、「はい」と少し鼻にかかったような黒田方丈の返事が聞こえる。顔を見るや、「おう、上がれよ。待っていた」。その瞬間、私は身も心も黒田方丈のふところに抱きとめられたような気分浸っていた。

横浜・善光寺二世中興大圓武志大和尚の訃に接したのは、黒田方丈の刎頸の友というべき東郷敏氏からの電話だった。新幹線からの携帯電話は聞き取りにくく、黒田方丈が亡くなったということだけ理解できた。電話は頼りなく不安

定な状態で切れた。われに返って時計を見ると、午前十一時頃。高槻から横浜へ向かう途中、私のことを思い出して知らせてくれたのだとわかった。

「黒田方丈」「方丈さん」。東郷氏も、私も、善光寺の家族も、檀信徒の多くも、みな親しみと敬愛の気持を込めて、こう呼んだ。その方丈さんが亡くなった？ 考えてはいけなことが起こっている。胸の中が激しく波立った。

入院したことは知っていた。一度、病室に見舞い、お元気な様子を拝見して何となく安心していた。退院後、名古屋から上京する足で善光寺に立ち寄り、普段と変わりなくお話しした（昨年九月三日）。少し精気がないようにも感じられたが、病後間もないためだろうと樂觀的に解釈した。その時以来のことだった。

夕刻、弔問にうかがうと、病院から戻ったばかりの遺体は、黒田方丈が晩年、ご両親を追慕

して建立した梅嘉庵に横たわっていた。自分の意思で動いているとは思えない状態で、促されるままに座り、安らかな寝顔と間近に對面した。「いろいろと、ほんとうに、ありがとうございました」——やっと出た言葉の端から嗚咽がこみ上げ、全身の力が抜け落ちていった。

もはや伝説と化している黒田方丈の足跡をここで振り返る余裕はない。しかし、その生涯は、寺の子として生まれた自分を厳しく、温かく育ててくれた師父白純大和尚と母堂への報恩感謝の思いに貫かれていた。永平寺の安居途中で下山し、列車を乗り違えてそのまま全国を托鉢行脚。旅中に「無一物中無尽蔵」の境地を開悟するという体験は、「身を削り人に尽くさん」の誓願となり、黒田方丈を支え続けた。

その時の心境を「ようやく自分の本分に気がつき、僧侶に立ち返ろうとしている。一日を疎かにしてはいけない。もしもいまを疎かにしたら

一生を疎かにしてしまおうと、佛の真の教えに氣付いたような氣がした」「そんな時、あたかも締め切った窓を開け、瞬間に光が差し込み部屋を明るくした時のように、私に差し込んだ一点の光、私の心の窓が開いたに違いない」と語っている。

柩を閉じて後、その人の評価は定まるといいう。だが黒田方丈の評価はまだ定まっていない。それには、もう少ししばらく時間がかかるだろう。赫々として光彩を放ち飛翔する熱球は突然光芒を失い、闇の中へ消えた。誓願に生きた黒田方丈が遺した人生の意味は、時間をかけて大きくふくらみ、やがて何事かを私たちに語りかけてくるような氣がしている。



